

事実と可能性の存在論

——『論理哲学論考』を通じて考える——

井 原 奉 明

この世界には何が存在しているのだろうか？ 筆者は、言語に関する自らの関心に沿いながら、ウィットゲンシュタインの『論理哲学論考』（以下、『論考』と略記）の読解を通じて存在論的問題を考察してきた。この小論は、これまで考えてきた思想の概要をまとめたものである。

1 私が出合うのは「事実」であって「モノ」ではない

「世界は成立していることがらの総体である。」（『論考』1）

「世界は事実の総体であり、ものの総体ではない。」（『論考』1.1）

「世界は諸事実へと分解される。」（『論考』1.2）

私の考える存在論において、『論考』冒頭のこの数節は非常に重要である。ウィットゲンシュタインは、世界は事実から成り立っているのであって、モノ（対象）を集めてきても世界にはならない、と書いている。常識的な見解とは一見すると異なるが、ウィットゲンシュタインのこの主張は決定的に正しいと思う。まず常識的な捉え方を提示し、それと比較しながら論じてみよう。

通常の常識では、世界はモノから成り立っているように考えている。私の目の前には机があり、本があり、コンピュータがあり、ペットボトルがある。部屋の中には照明器具、サイドボード、ソファ、クッション、テレビ、テーブル、絵画、写真立て、置物等、多くのモノが存在している。違う部屋にはまた非常に多くのモノがあるし、玄関の外に一步出れば、そこにもモノはあふれている。モノには無生物だけでなく生物も含まれるし、視覚的に捉えられるモノばかりでなく、他の知覚を使って把握できるモノもある。分子レベルの話に限らなければ、原子、電子、素粒子とミクロレベルのモノだって存在していると言えるだろう。¹ 古代ギリシアに生まれた哲学者が世界の根源として考察したのはモノだったし、自然科学でも世界を構成する最小のモノを探求し続けてきた。² 私たちの素朴な発想としては、「世界はモノから成り立っている」と考える方が自然のように思われる。「世界＝モノの総体」なのではないか？

ここで少し止まろう。「（今挙げた例だけで考えるならば）世界はモノの総体ではないだろう。モノの中に、『個体』しか含まれておらず、『性質』や『関係』がないではないか。世界の中に『性質』や『関係』があることは自明である」と考える人がいるかもしれない。実はその通りである。先に挙げた例に、「性質」や「関係」をほのめかすモノは確かになかった。しかし、である。「性質」や「関係」をモノに含めたとしたら（私は含めるべきだと思うが）³、「世界はモノの総体である」と言えるのだろうか？

常識的には「言える」ように思う。私の目の前に机がある。本がある。お茶の入ったペットボトル

がある。これら個体の他に、机の材質・色・形状・大きさ・重さ、本の材質・色・形状・大きさ・重さ、ペットボトルの材質・色・形状・大きさ・重さ等といった性質がある。ペットボトルの中のお茶にも性質がある。それから、机と本との間には「机の上に本が載っている」という関係がある。机とペットボトルとの間にも「机の上にペットボトルが載っている」という関係がある。ペットボトルと本との間にも「(私から向かって) ペットボトルの右側に本がある」という関係がある。個体だけでなく性質や関係まで含めれば、世界はこのようなモノから成り立っているように思われる。

けれども、それは違う。このような常識的な考え方は間違っていると私は思う。モノをいくら集めてきても世界にはならない。モノを集めてきた世界とは、どのような世界を言うのか、考えてみるとよい。それは、机、本、ペットボトル、お茶、それらの性質、関係が、結合せずにバラバラのまま成立している世界のことである。例えば、机、四角い、茶色い、といったモノがひとつに結びつかないで存在している世界、のことである。わかりにくいかもしれないので、「モノ」と「事実」とを比較して説明してみよう。「机」、「四角い」はそれぞれモノであるが、「机は四角い」は事実である。「机」、「茶色い」はそれぞれモノであるが、「机は茶色い」は事実である。つまり、モノとしての「机」は、性質も関係も剥ぎ取られたモノを言う。モノとしての「四角い」は、その性質が帰属している個体が剥ぎ取られているモノである。モノとしての「茶色い」からも、個体は剥ぎ取られている。モノとは、いわば剥き出しになっているのであって、個体に性質が付与されてしまうと、それはモノでなく事実になるのである。

私たちは、一見するとモノに出合っていると思ってしまうけれども、実はそのようなことはあり得ない。私たちは、モノ同士が組み合わさった状態（個体なら、性質や関係を持った状態）に出合う。すなわち、私たちが出合うのは事実であって、モノではない。モノがモノ単独で現れることはない。私の目の前にあるお茶は、個体・性質が一体となった状態でしか私の前に現れることがないのであって、色や味や液体という性質のないお茶に出合うことはないのである。

故に、「世界は成立していることがらの総体である」とウィットゲンシュタインが言う時、彼は正しい。「世界は諸事実へと分解される」のであって、モノに分解されるのではない。現実には私たちが生きる中で出合うのは事実であり、モノではないのである。

II 私たちは事実の世界だけに拘束されて生きているのではない

ここからは、私が考える存在論を、「現実の世界」「事実」を出発点として深めていきたい。

現実には私たちが生きる世界は事実の世界である。この事実の世界、言い換えれば経験的な世界に「今・私・生・ここ」が欠如していることはあり得ない。これは、出発点たる現実の世界の要諦である、と私は思う。現実の世界を生きるということは、事実の世界（経験的な世界）を生きることには他ならないが、私が生きている限り、「今」と「生」と「ここ」は常に「私」に伴っている。私は過去を生きることはないし、未来を生きることもない。私が生きるのは常に今である。同様に、私はあそこやそこを生きることはなく、常にここを生きる。⁴つまり、現実の世界において「今・私・生・ここ」が消え去ることはなく、事実の世界を生きる時、「今・私・生・ここ」は常に共在している。

基本的に人間以外の動物の世界は、このような世界なのではないかと思う。ユクスキュルによって唱えられた環境世界論を持ち出すまでもなく、動物は自分の置かれた事実の世界（環境）に固着させられているように思える。動物は事実の世界を超えることができず、事実の世界に、いわばぴったり

に生きている。「ぴったりに生きる」とは若干わかりにくい表現だが、本能（動物によっては、ある程度の学習能力）を働かせて一定の刺激の下で必然的な反応をし、事実の世界において生きるのに必要な情報を過不足なく掬い上げ、生きることができる、という意味である。動物は、事実の世界のみに生きる。

けれども人間はそうではない。人間は、一定の刺激に対して唯一通りの恒常的な反応を排他的に示すだけの不自由な存在ではない。一定の刺激が与えられれば、何通りもの反応を示すことができるし、同時に何通りの反応が可能であることも知っている。自分の置かれた具体的な環境、つまり事実の世界に固着させられ、拘束されるわけではなく、事実の世界を超えていくことができるのである。

事実の世界を超えとは、すなわち可能性の世界を開くということである。難しく考える必要はない。私たちは普段、当たり前のように簡単に可能性の世界を開いている。「今・ここ」を離れて仮想を巡らす時、私たちは可能性の世界を開いているのである。私たちは事実の世界に生きながら、可能性の世界を開き続けている。例えば、＜ペットボトルにお茶が入っている＞という事実が「今・ここ」にあるとする。この事実を前にして私は、＜＜ペットボトルにお茶が入っていない（空である）＞＞とか、＜＜ペットボトルに一層多いお茶が入っている＞＞、＜＜ペットボトルにジュースが入っている＞＞とか、現実化していない可能性を考えることができる。今私が考えていることは成立していることから（事実）ではなく、成立していないことから（可能性）である。私たちは事実に出会い、そこを出発点として、事実思いを巡らすこともできるし、事実でない可能性を考えることもできるのである。

Ⅲ 可能性の世界はどうやって開かれるか？（可能性の世界はどこにあるのか？）

では、可能性の世界はどこにあるのか？ 古来、この問いに対し、いろいろな答えが考えられてきた。哲学的な立場が違えば答えは異なるし、『論考』も多様な解釈を許してきた。可能世界論、パラレルワールドといった世界の実在を信じている論者も数多くいるだろう。

私は「可能性の世界は思考によってしか開けない」と考える。思考と無関係に、現実のどこかに可能世界がある、事実の世界を取り巻くように可能世界がある、現実化しなかった可能世界が事実の世界を重層的に覆っている、このような主張を私は受け入れない。私たちが生きる現実の世界は、可能性の世界の中のひとつが偶然実現した世界ではない。私がいなくても可能性の世界がどこかにあるということはありません。可能性の世界は私によって、私の思考の中でしか現れないのである。現実をいくら見ても、いくら穿り返しても、可能性は現れず、私が働かせている思考の中でのみ、現れてくるのである。先の表現を使えば、「今・私・生・ここ」は事実の世界と共にあるだけであって、どこか別の可能性の世界（思考と無関係に存在する可能世界）に「今」があったり、「私」がいたり、「ここ」があったり、「生」を伴っていたりすることはあり得ないと私は思う。

可能性は完全に思考に依存しており、思考による操作によって、それによってしか開けない。可能性を開くためには、(a) 事実を構成要素に分解し、(b) その構成要素と対応する代替物を持って像を作り、(c) その構成要素を組み替える、ことが必要だ。例えば、＜ジョンはメアリーに話しかける＞という事実から可能性を開くためには、その事実を「ジョン」「メアリー」「話しかける」といった対象に分解することがまず必要だ。それから、その対象に対応する「ジョン」「メアリー」「話しかける」という代替物（名）を使って、「ジョンはメアリーに話しかける」という像を作る。そして、それを組み替えて＜＜メアリーはジョンに話しかける＞＞といった、現実にはない組み合わせを作り出す。

これが可能性を開くということである。こうした過程を踏んで初めて現実の世界から可能性が開かれる。以下、少し詳しく説明を加えてみよう。

(a) 事実を構成要素に分解する——現実の世界は「視点」がなければ分節されない

先の段落で、「〈ジョンはメアリーに話しかける〉」という事実から可能性を開くために『ジョン』『メアリー』『話しかける』といった対象に分解することがまず必要だ」と書いた。この分解は何の問題もなくなされるように思えるが、実はそうではない。私たちが事実を対象に分解できるのは、現実の世界を分節する視点を既に持っていて、その視点を通して世界を眺めているからである。

一見すると、私たちは、既に分節された世界に生きているかのように思われる。目の前にあるコンピュータ、机、本、ペットボトル等、対象はひとつひとつ輪郭を持ったモノとして私に立ち現れる。けれども、現実の世界がそれ自身の内であらかじめ区切られており、視点を離れても分節されていると考えるのは間違いである。視点を離れたら現実の世界は未分節であり、事実は「今・ここ」を中心として連続的に際限なく延びていくだろう。認識論的にみると、知覚世界においては、視覚的にも聴覚的にも、どこかで何らかの切れ目を入れ、人工的な単位を設けなければ、混沌とした星雲状の不定形な（そして無意味な）世界しか捉えられないと思われる。ちょうど、プリズムを通した太陽光線を見たとしたら、そこに明確な差異を見ずに、色彩が連続的に変化していく様しか見えないであろう、というように。⁵

事実が分節されていない状態で私たちの前に現れるのだとしたら、そこに個体や性質、関係を見て取ることはできなくなる。今仮に、〈ペットボトルの中にお茶が入っている〉という事実だけが存在する世界を想像してみよう。この世界において、もしも〈ペットボトルの中にお茶が入っている〉という事実が切れ目が入れられず、〈ペットボトル〉も〈お茶〉も〈中に入っている〉も区別できないのだとしたら、もはや〈ペットボトル～お茶～中に入っている〉という事実は一体化してしまう。このひとつつながりの連続した事実においては、もはやそのペットボトルの中にお茶が入っていることしかあり得なくなってしまうだろう。このような時、可能性の世界を開くことはできない。思考によって可能性の世界を開くためには、差異の区切れ目なく連続した事実から、「ペットボトル」「お茶」「中に入っている」などといった対象をバラバラに分節できなければならない。そうでなければ、〈ペットボトルの中にお茶が入っている〉という事実から《ペットボトルにお茶が入っていない》という可能性や、《ペットボトルの中にジュースが入っている》という可能性が開かれることは永遠になくなるだろう。

今仮定した世界は〈ペットボトルの中にお茶が入っている〉という事実だけが成立している世界であった。しかしながら、現実の世界は〈ペットボトルの中にお茶が入っている〉という事実だけで成り立っているのではなく、無数に多くの事実から成立している。だから、視点がなければ、〈ペットボトル～お茶～中に入っている〉という事実と、例えば〈机～本～上にある〉という事実との間にも差異が存在しないことになる。〈ペットボトル～お茶～中に入っている～机～本～上にある〉と、事実は一体化していることになる。そして、この事実はまた他の事実とも連続化しているのであり、現実の世界は連続的に一体化した事実の塊だ、ということになるだろう。これでは、私たちは事実の世界に拘束され、可能性の世界に踏み出すことはできない。

現実の世界を分節し、対象を切り出す視点は、動物で言えば本能である。しかし、人間はそうでは

ない。このような視点のひとつ、そしてその最たるものは、言語である。人間の場合、現実世界の分節は言語によってなされると言ってもよい。私たちは言語によって不定形の塊である事実と区切れ目を入れ、対象を切り出す。だから、私たちにとって言語と世界は同値に分節されていると言える。この考え方はソシュールに始まる言語学を学んだ者であれば慣れ親しんだものであって容易に理解できるだろう。〈ペットボトルにお茶が入っている〉という事実を見る時、私たちは言語を通して、その言語によって分節されたように見ているのだ。私たちは、既に言語化された人間として世界に生きているのであり、私たちが生きる現実の世界はいわば言語によって構造化された世界なのである。そこでは、言語の分節と世界の分節が一致している。いかなる言語をも持たない者が今仮に同じ事実を見たとしたら、すべてがグチャグチャに溶け合って連続的に一体化した事実の塊が見える。しかし、同じ分節構造を持った言語を持つものが同じ事実を見たら、同じような対象を見出すだろう、というのが私の考えである。事実を対象に分解できるという可能性は、もっぱら私たちが言語を持っていることに依存しているのである。

(b) 構成要素と対応する代替物を持って像を作る——言語と世界との対応の根源的先行性

言語によって分節された世界は、言語と共通な構造を持っている。構成要素同士が関係づけられて対応し、構成要素を組み合わせたもの同士も対応する。関係づけられた代替物を使って、現実と相同構造の言語を作ることを「像を作る」と呼ぶ。もちろん、像という概念は言語よりも包括的な概念であり、言語は像の一種とみなすことができる。像は、言語において命題（『論考』の用語）をその典型とする。一般的に言えば、像は現実に対する模型であり、像の構成要素（『論考』の用語では「名」）は対象に対応する。現実から出発する私たちは、言語によって現実世界を分節するが、その分節に応じて「名」と「対象」が同時に、かつ同値に切り出されるのである。

では、「像を作る」とはどのような行為か？ これを、現実の事実と言語表現（知覚可能な記号）というそれぞれ独立している別個のものに写像という関係づけを与えて新たに結びつける行為、と考えてはならない。この関係づけは、名と対象の関係づけと同様に、既に分節され独立している同士を結びつける行為でなく、不定形の塊を同時に分節するという行為なのである。

この同時性ということから、像とそれが写す事実との対応関係が根源的な先行性を持つことを理解しなければならない。私たちが、〈ペットボトルの中にお茶が入っている〉という事実を見て取るのは、その事実を端的に「ペットボトルの中にお茶が入っている」という像（命題）で写し取っているからだ、この命題がこの事実の像であることはすべてに先立って明らかでなければならないのだ。言い換えれば、私たちは、この命題とこの事実は構造（形式）を共有しているから対応関係にあるのだ、という順序で思考するのではなく、この命題とこの事実が対応しているという根源的な関係づけを基にして、両者が何らかの構造（形式）を共有している（可能性がある）と思考するのである。私たちは、言語を話す限りにおいて既に言語の意味了解の中におり、「像を作る」という行為は根源的な行為であると言える。像とそれが写す事実との対応関係は何ものにも先行し、懐疑の余地を残さないのだ。

(c) 構成要素を組み替える——可能性の世界（形式の世界）を開く

言語により世界が分節され、対象が切り出される。事実は対象の組み合わせとして捉えられ、それ

は根源的な先行性を持つ関係にある命題によって写し取られる、ということを論じてきた。ここまでの内容から、私たちが言語によって現実の世界をくまなく写し取れることは明らかである。

次に、可能性の世界をいかにして開くか、について説明しよう。可能性の世界が開かれるのは、言語を通じて思考の中で対象の組み合わせを変えた時だと述べた。ここで反論が予想される。「言語と現実の世界は同型構造を持っているのだから、言語を通じて思考の中で対象の組み合わせを変えることで可能性が開かれるのなら、言語を使わずに対象の組み合わせを変えることでも可能性が開かれるのではないか？」と。私は、この反論は成立しないと考える。理由は簡単だ。野矢はこの理由を次のように述べている。「例えば机という対象と本という対象を〈上にある〉という関係で結合しよう。そしてそれはどういうことか。それはつまり、ありていに言えば机の上に本を置くということではないのだろうか。そしてそうだとしたら、それはもはや現実の事実であり、たんなる可能性ではない。」⁶ そう、その通りである。目の前に〈ペットボトルの中にお茶が入っている〉という事実があったとする。このペットボトルの現物に入っているお茶を飲み干し、空になったそのペットボトルの現物にジュースの現物を入れてみる。こうして生じるのは〈ペットボトルの中にジュースが入っている〉ということがらである。これは「可能性」か？ いや、決して可能性ではない。紛れもなく〈ペットボトルの中にジュースが入っている〉という現実の事実である。もうひとつ例を挙げよう。〈(私から向かって) ペットボトルの右側に本がある〉という事実があったとする。そのペットボトルの現物と本の現物を左右入れ換えてみる。すると、〈(私から向かって) ペットボトルの左側に本がある〉という事実が生じる。これは可能性か？ いや、当たり前だが現実の事実である。すなわち、現物をあちらこちらに動かせば、生じるのは事実であって、決して可能性ではない。繰り返し言おう。可能性の世界を開くためには現物でなく、現物の代替物を使うしかない。代替物を使って、その組み合わせを替えることで可能性は開かれる。よって、可能性は言語を通して思考の中でのみ開かれることになる。⁷

〈ジョンはメアリーに話しかける〉という事実から「ジョン」「メアリー」「話しかける」という対象を切り出し、「メアリーがジョンに話しかける」という命題を作る時、この命題は何を写しているのだろうか？ もちろん「可能性」である。この可能性は、現実には存在していないので事実ではない。この可能性のことを「事態」(『論考』の用語)と呼ぶことにしよう(事態を表記する時には《メアリーはジョンに話しかける》と書くことにする。実は3ページ目で既にこの表記を使っていたのだが)。事態は、可能的な事実を表す。事態と事実を比較してみよう。事実とは、常に現実化しており、現実化していない事実はありえない。今、目の前に成立しているこの現実、これが事実である。一方、事態は現実化と無関係な単位として考えられている。事態は、可能性として成立し得ることがらを言う。事実には成立している事実しかなく、成立していない事実という言葉表現は自己矛盾をきたすが、事態はそうではない。事態は成立することもしないことも可能である。

事態という存在論的単位を導入することによって、事実を「成立している事態」とみなすことが可能となる。なぜ、事実を事実として把握しないのか？ その理由は論理にある。現実の世界は論理化されていて、論理法則が成立する世界であり、即ち論理が成立しうる構造を持っている世界である。けれども、諸事実の中に論理を見て取ることはできない。私たちが出会う事実をいくら見ても、そこに論理形式や論理的な構造を見出すことはできない。論理、論理構造を見て取るためには、論理形式を備え、論理法則を適用できる何らかの存在論的単位に事実から移らねばならないのだ。つまり形式の世界に移ることが必要なのである。こうして導入されるのが事態である。事態は論理形式を備えて

おり、論理法則の適用できる世界を構成する。

可能性の世界、事態の世界の形式は、対象によって構成される。事態の構成要素たる対象が論理形式を持っているのである（形式とは構造の可能性に他ならない）。この意味において、論理形式、論理構造の基盤は対象にあることになる。対象が論理形式を持つということは、対象が論理的な構造の可能性を持つということであるが、対象はすべての対象と結びつく可能性を持っているのではなく、どの対象と結びつくか、結合可能性を制限された形で持っているものであり、それがその対象の論理カテゴリーや論理形式を特徴づけている。例えば、《丸い四角》や《尖った球》、《透明な机》、《本の中にジュースが入っている》、《色のない緑色の考えが獐猛に眠る》といった事態を私たちは考えることができない。それらは、相互に結合可能性を持っていない対象同士を結び付けてしまっているからである。⁸

事態という新たな存在論的単位を設定し、それが形式を備えていること、その形式は対象によって構成されることを見た。ここまでをいったん整理してみよう。現実の世界、「今・私・生・ここ」を伴った世界は、事実が連続的に一体化した世界である。言語を通さなければ現実の世界は未分節であり、対象も論理形式も見えない。そこを出発点として、言語を通じて世界を捉える（実際には、言語を通さない現実の世界を見ることはない。私たちは言語化されており、私たちが眺める世界も言語化されている。言語による世界の分節は「言語を通じて世界を捉える」といった意識化に根源的に先行している）。思考の中において開かれた可能性の世界は、事実を超えた事態の世界である。事態の世界は、構成要素たる対象の形式を基に、形式化されている（ただし、このようなことを見て取れるのは、私たちが言語を持っているからである。事態が構造化されていること、対象が形式を持っていることは、その対応物である命題（『論考』では要素命題）、名を通じて見出されるしかない）。

こうして見てくると、出発点たる現実の世界と、開かれた可能性の世界には大きな違いがあることが理解できるだろう。それは先に述べたように、論理を見て取ることができるかできないかの違いに留まらない。時間・変化といった点に関しても両者は異なっている。現実の事実は切れ目なく連続的に変化し続けているのに対し、事実を写した命題は変化していかない。現実の世界において常に今を生きている私たちにとって、「今の事実」を写した命題はすぐに「過去の事実」を写した命題となってしまう。しかし、その「過去を写した命題」は変わらない。命題自身が勝手に変化していくことはあり得ない。これは写真と並行して考えればよいだろう。「今の事実」を撮影した写真はすぐに「過去の事実」を写したものとなる。「今の事実」は変化し続けていくが、写真に撮影された像は変化していくことがない。言語や写真といった像は、現実の変化（時間的な流れ）を変化のままに写し取ることができない。故に、言語化された可能性の世界自体は無時間的であると考えられるだろう。つまり、言語や写真を例に取って語った無時間的な性質はすべて事態に、すなわち、可能性の世界にも当てはまるのだ。事態によって構成される可能性の世界においては、時間は流れないし、現実のような変化もない。可能性の世界（論理が適用される形式の世界）では、時間の流れが捨象されているのだと思われる。といって忘れてはならないのは、可能性の世界が超越的などこかの場所にあるのではない、ということだ。繰り返すが、可能性の世界は思考の中で開かれるのみである。言語を通じて思考の中で構成されるという面から考えて、このような可能性の世界は共時態とみなし得る、と私は考える。共時態だからこそ、論理形式を備え、論理構造を有し、普遍的な論理法則が適用される世界となっているのだと思う。⁹

一点付記しておきたい。可能性の世界の方が現実の世界よりも広い概念だと考える人がいるかもし

れないが、それは誤りである。現実の世界には「成立している事態＝事実」しかないのに対し、可能性の世界には「成立している事態」も「成立していない事態」もあるのだから、可能性の世界が現実を包括的に含んでいるのだ、と考えてはならない。なぜなら、可能性の世界は、現実の世界を出発点としない限り開かれられないという意味で、現実の世界に依存しているからだ。私たちがいくら可能性の世界を開いたところでその実在は思考の外には広がっていかず、思考の内部に留まる。そしてその世界は私によって開かれ、私と共にある。私と共にあるならば、それは「今・私・生・ここ」と共在する現実の世界から外に出ないことになるだろう。つまり、可能性の世界は「私」を離れて存在することはない。「今」を離れて存在することもなければ、「生」を離れて存在することもない。可能性の世界は、いくら拡がりがあるようにみえても、現実の世界を超え出ることはない。可能性の世界は、現実の世界から事後的に構成されるしかないものであって、その点において現実の世界内に収まると言えよう。

可能性の世界が現実の世界を超え出ない理由はもうひとつある。それは、対象の存在だ。対象は、現実の世界に生きる私たちが、言語を通して世界を分節し、切り出したものであった。対象は、現実の世界に存在するものに限られる（だから、有意味な命題によって語ることでできる事態は、現実存在する対象を基に作り出されたものに限られる）。現実存在しないもの、それは対象ではない。このような対象が、現実の世界の土台にもなっているし、可能性の世界の礎石にもなっている。これは世界を世界として語ることを可能にする土台であり、その意味で超越論的な存在であると言えるかもしれない（対象と名との対応関係が根源的先行性を持つから）。いずれの世界も、根本的な次元において、同じひとつの「対象の総体」を礎石としており、それによって限界づけられているのである。その意味でも、可能性の世界が現実の世界を超え出ることはない、と言える。

IV そして再び対象へ

これまで重ねてきた考察を基に再び出発点に戻ってみたい。

「対象の総体」について、この論文の出発点で考察した。その際、世界は対象の総体ではない、と論じたわけだが、それは性質や関係を剥ぎ取られた個体や、個体を剥ぎ取られた性質などを考えることができないからであった。ここでは違う例を挙げてみよう。「豆電球」を例にとると、《豆電球が点いている》というのは事態である。この事態において「豆電球」という個体（対象）は「点いている」という性質（対象）と結びついている。けれども、「豆電球」と「点いている」を切り離れた単独な対象を思考することはできるだろうか？〈点いている〉も〈点いていない〉もない、性質を剥ぎ取られた個体の「豆電球」。逆に、「豆電球」という個体を剥ぎ取られた〈点いている〉という性質。どちらも、どう頭をひねっても私には考えられない。それは、現実の世界においても可能性の世界においても、対象は、他の対象との結合可能性の外には思考し得ない、ということである。対象はそれ自体単独で存立することなどできない。事態の構成要素となり得ることが対象の本質なのである。

すると、私たちが生きる現実世界の土台、私たちが開く可能性の世界の礎石たる対象の総体において、どのような事態があるかを私たちは語ることができるが、どのような対象があるかを語ることはできない、ということになる。言い換えれば、他との結合可能性との内にある対象については、事態を考えることを通して接近することができるのに対して、対象そのものの存在を考えることはできない、ということだ。あらゆる性質を剥ぎ取られた「豆電球」を考えることができない以上、「豆電球

は存在する」と語っても、その命題は意味を持たない。私たちはそれぞれが自分の世界の成立を条件づけているという意味において、「世界は私の世界である」と同時に「私は私の世界である」のであるが、自らの世界の礎石たる対象がどのようなものか、どのような対象が存在しているのか、私たちは語ることも考えることもできないのである。可能世界は私たちが考えられるすべてのことが含まれている世界であるのに、その礎石だけは（単独なモノとして）考えることができないという背理。この礎石こそ、言語化しえない、対象化しえない、そして別様ではあり得ない超越論的基盤であり、神、絶対的な他者等、超越との接点になっているのだと思われる（超越の理解は、これが鍵になっているに違いない）。

対象の総体は、その結合可能性をすべて合わせると可能性の世界になるわけだが、そこに拡がっているのは無時間的な論理の世界であった。そして時間ばかりか、現実の世界の要諦である「今・私・生・ここ」が解消されてしまっている世界なのである。え、「私」までが解消されるのだろうか？

「可能性の世界は思考の中でのみ開かれるのだとすれば、その思考を働かせる主体の存在は疑えないのではないか？ 可能性の世界で主体が消去されてしまっているとしたら、誰が像を作るのか？」という反論があるだろう。私という主体が解消されるということはある意味常識に反しているから、このような反論も当然であると思う。しかし、『論考』にあるように、思考し表象する主体は存在しないと私は考える。ウィトゲンシュタインは、私が見出した世界という本を書くとしたら、主体についてだけはこの本で話題になることがない、と考えていた。まさに世界の中で主体は消去されるのである。これはきつこういうことだ。通常、思考することにおいて、思考する対象と思考される対象は必要不可欠と考えられている。しかし、思考する対象は対象として「対象化」されている限り、思考された対象でもある。だとすると、そこには、思考することと思考された対象しか残らない。思考することにおいて、思考するモノは必要不可欠どころか、消去されてしまうのである。¹⁰ そして、消去された主体は、世界全体を成立させる条件であるにもかかわらず存在しない、という意味において、世界の限界として現れるのである。この意味でのみ、世界は私の世界であり、私は私の世界である、と言える。

紙幅の関係上、論じられないが、「私」だけに限らず「今」も「生」も「ここ」も可能性の世界においては消去され、世界の限界として現れる。こうして捉え直された可能性の世界、無時間的な共時態、論理の世界こそ、ウィトゲンシュタインがスピノザ風に語った「永遠の相のもとに」（『論考』6.45）捉えられた世界のことであろう。

V 最後 に

可能性の世界は、共時態であると私は考えている。その無時間的な構造の中で、対象は不変であり、存在し続ける。では、対象の通時的同一性はどうなっているのだろうか？ 可能性の世界自体の通時的同一性はどうなっているのだろうか？ また、可能性の世界の無時間性と現実の世界の時間性は、時間論の観点からどのように考えられるのだろうか？ 果たしてこれらの問題は思考できるのかできないのか？ こうした問いは私にとって極めてスリリングであるのだが、これらの問いに対する検討は次の機会に譲ることにする。

註

- 1 「存在」そのものに関する哲学的懐疑については、ここでは問わない。また、知覚に依らないモノの存在に関する議論については今後の検討課題とし、別の機会を俟ちたい。
- 2 現代物理学という超ひもやら波動やらがモノかどうかは本論と無関係である。
- 3 『論考』の解釈において、性質や関係が対象に含まれるかどうかに関しては昔から今に至るまで議論が重ねられている。私は「含まれる」と考えている。
- 4 「今」を生きている人が、ボートから川に落ちるような意味で、「今」から零れ落ちることはないように思われる。私自身生まれてこの方、意識的な時もそうでない時も、「今」から零れ落ちてしまったことはないと思うし、そのような現象に気づいたこともない。「ここ」に関しても同様なことが言える。私は異なる「ここ」を同時に体験したことが（残念ながら）ない。「今」「私」「生」「ここ」は現実の世界において唯一性を持っている。この意味で、「今・私・生・ここ」は何らかの共通性を持っていると思う。いや、もしかしたら、これらは同一のものの異なる側面を表しているだけであって、視点の違いしかそこにはないのかもしれない。
- 5 モノの輪郭のなさを説明するとしたら、視覚よりむしろ嗅覚の方が適切かもしれない。
- 6 野矢 (2002) p. 35
- 7 この考え方を明確に述べたのは野矢である。野矢 (2002) 参照のこと。
- 8 対象の結合可能性は名の結合可能性と一致する。対象の結合可能性をみるためには言語が必要だが、この例からもわかるように、言語の方がリッチであることを忘れてはならない。つまり、事態の領域においては「成立している」「成立していない」可能性しかないが、命題においては「成立している事態の像」「成立していない事態の像」に加えて「可能性としては存在しない事態の像（果たして像と呼べるか?）」があり得る。これらはそれぞれ「真なる命題」「偽なる命題」「無意味な命題」と分類される。つまり、言語において私たちは、思考の限界を超えた無意味な命題を生み出すことが可能となっているのである（ウィットゲンシュタイン流に言えば、現実や思考は、限界の向こうに立つことができないので限界を引くことはできないが、言語に引くことはできる、ということだ）。ここから言語批判が要請されるのだが、言語の方を実在と考える可能性はないのだろうか？ 私としてはこの可能性を探っていきたいと考えている。
- 9 現実の世界と可能性の世界との対比を、マクタガートの有名な「A 系列/B 系列」と重ね合わせて論じることができるかもしれない。井原 (2005) 参照。
- 10 「私」の消去に関しては入不二 (2006) が鮮やかな議論を展開しているので参照のこと。なおここでは、ハイデガーのいう現存在分析には立ち入らない。

主要参考文献

- ウィットゲンシュタイン 『論理哲学論考』 野矢茂樹訳 岩波文庫 2003
- 井原奉明 “Wittgenstein as a Detenser: Tractatus’ Ontology as Timeless” *Time and History, Contributions of the Austrian Ludwig Wittgenstein Society (28th International Wittgenstein Symposium Papers)* 2005 pp. 306-8
- 入不二基義 『ウィットゲンシュタイン 「私」は消去できるか』 NHK 出版 2006
- 鬼界彰夫 『ウィットゲンシュタインはこう考えた』 講談社現代新書 2003
- 末木剛博 『ウィットゲンシュタイン 論理哲学論考の研究 I』 公論社 1976
- 末木剛博 『ウィットゲンシュタイン 論理哲学論考の研究 II』 公論社 1977
- 永井均 『ウィットゲンシュタイン入門』 ちくま新書 1995
- 野矢茂樹 『ウィットゲンシュタイン「論理哲学論考」を読む』 哲学書房 2002
- 細川亮一 『形而上学者ウィットゲンシュタイン 論理・独我論・倫理』 筑摩書房 2002
- Anscombe, G. E. M. *An Introduction to Wittgenstein's Tractatus* Hutchinson 1959

- Black, Max *A Companion to Wittgenstein's Tractatus* Cornell UP 1964
- Copi, Irving M. & Beard, Robert W. (eds.) *Essays on Wittgenstein's Tractatus* Macmillan 1966
- Fogelin, Robert J. *Wittgenstein* (2nd ed.) Routledge & Kegan Paul 1987
- Glock, Hans-Johann *A Wittgenstein Dictionary* Blackwell 1996
- Griffn, James *Wittgenstein's Logical Atomism* Oxford UP 1964
- Hacker, P. M. S. *Insight and Illusion* (revised ed.) Oxford UP 1989
- Hintikka, Merrill B. & Hintikka, Jaakko *Investigating Wittgenstein* Basil Blackwell 1986
- Maslow, Alexander *A Study in Wittgenstein's Tractatus* University of California P. 1961
- Pears, David *The False Prison* vol.1 Clarendon Press 1987
- Rhees, Rush *Discussion of Wittgenstein* Routledge & Kegan Paul 1970
- Sluga, Hans & Stern, David G. *The Cambridge Companion to Wittgenstein* Cambridge UP 1996
- Stenius, Erik *Wittgenstein's Tractatus* Basil Blackwell 1960

(いはら ともあき 文化創造学科)